ある天使の生き方

RAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ある天使の生き方

【Ｎコード】
Ｎ２３２６Ｔ

【作者名】
ＲＡＮ

【あらすじ】
人間ではない種族の物だけが住む箱庭のような世界があった。
その世界に住む、好奇心旺盛な天使の少女と、その友人のクールな水の精の少女。
ある日、天使の少女の提案により、世界の外に出ることになり……。

※サイト、ｄノベ転載

<1>

「シールーノ！　いるんでしょ！　出てきてよぉ！」

一人の少女が、森の中の湖の側で大声で叫んでいた。

その湖は、そこだけ光を浴び、美しく輝いていた。

横髪を長く伸ばした少女の金髪に太陽の光が反射し、眩いほどだった。

彼女の背中には、天使の特徴とも言える白くて綺麗な翼が生えていた。

「……リアン……今日は何をするつもりなの？」

湖から出てきたのは、深い青色の短い髪、澄んだ緑色の鋭く冴えた目をもった少女――シルノだった。

少し呆れたような表情を浮かべて、金髪の少女――リアンを見る。

リアンは笑顔でシルノを見ていた。

この二人は、外見も性格も全く正反対のように見えるのだが、どういうわけか仲が良かった。

二人は、人間よりも長生きしている天使と水の精霊とはいえ、同じ種族の者達に言わせればまだ幼い。

今が一番遊びたい盛りだった。

リアン達の遊び場は決まってこの森の中だけ。

この森は精霊や天使など、この世界に存在する数少ない種族達が住む場所である。

この森の外は人間が支配する世界で、ここから一歩出てしまえば、非常にリアン達にとっては危険な世界になってしまうのだ。

だが、人間のいる町へ出向き、ある者は働き、ある者は興味本位で観察をしたりなど、人間の世界に溶け込んでいるものもいる。
それが許されているのは、立派に成人した者だけである。
成人した者しか出ることを許されていないため、防衛も兼ねて、彼らの森には結界が張られている。
リアン達は外に出ることにとても憧れていた。
だから、リアンはこんなことを言ったのかもしれない。

「ねぇ、私、外に出る方法知ってるの」
「え……？」
いつも冷静なシルノが驚いた顔をしているので、リアンは気分が良くなってきた。

「あのね、あたし見つけたの。結界にちょうどあたし達が通れそうな穴を」
シルノは嬉しそうなリアンとは対照的に、明らかに不審そうな顔をした。
「ねぇ、リアン、それって何かおかしくない？　結界というのは私達の世界と人間の世界を断絶するためにあるわ。その存在意義は重要で、綻びがないように毎日見回りさえしてるのよ。だから、その結界に穴があるなんて、明らかに故意によるものだわ。長に報告しなければ。リアン、外の世界は危険なのよ。だからこそ成人した者しか外に出れないの。私達にはまだ早すぎるわ。自重してちょうだい」
リアンは途端にしかめっ面になる。全くおもしろくない、という顔だ。

「規則なんて破るためにあるのよ！　いいもん！　シルノが来ないならあたし一人で行くから！！」
リアンはそう言って、森の奥へと行ってしまった。

きっと彼女が穴から出るのは夜中だ。
昼は誰かに見つかりやすいから。
それぐらい考える頭は彼女にはある。
シルノはそう考えて、その場は見送ることにした。
リアンは間違いなく外に出て行くだろう。
ここで長に報告して、それを阻止することもできたが、リアンはそれでは納得しない。
それなら、自分も一緒に出て、外の世界の恐ろしさを体験して、二度と外に出ないと思わせればいい。
それに、実はシルノも外の世界に興味があった。
シルノが止めなかった理由は、こちらの方が大きいかもしれない。
ここが、リアンと気が合うところとも言えるだろう。

シルノは、湖から出る。
そして、腰にあった水筒に湖の水を入れる。
水の精霊は水がないと生きていけない。
側に一滴の水があるだけで水の精霊はそれを拠り所として生きていける。
外に出るのなら、その準備をしなければならない。
シルノは、リアン気づかれないように、リアンの後をつけていった。
こうすれば、楽にリアンの言う結界の綻びに行けるだろうという考えて。

そして、森からは寝息しか聞こえない夜になった。
音を立てないように、ゆっくりと動く影が一つ。

「やっぱり行くのね」

突然声が聞こえ、影は大きく震えて、その歩みを止める。
しかし、聞き覚えのある声に、苦笑いがもれた。

「やっぱり来ると思ってた」
影はリアンだった。
声の主のシルノも、子供を見る母のような表情と、諦めの色が混ざったような笑顔を浮かべてリアンを見ていた。

「しょうがないわよね」

リアンは満面の笑みを浮かべて、シルノに手を差し出した。
シルノはその手を取る。

「じゃあ、行こうか！　新しい世界へ！！」
「恥ずかしい台詞言うんじゃないわよ」

二人は結界の穴に入り、その姿は見えなくなった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2326t/

ある天使の生き方

2011年5月31日12時40分発行